





# 2012年、Ice Cube国際共同実験において 超高エネルギーニュートリノを検出

Bert

"Ernie"

(780Tev-5.6PeV, 890TeV-8.5PeV)

相互作用が殆んど起こらないため 銀河磁場による軌道の湾曲が無く、 正確な到来方向の情報 を得られる可能性がある。



無衝突衝撃波 0

#### 平均自由行程 >> 電磁場による散逸のサイズ

このようなプラズマを無衝突プラズマといい 無衝突プラズマ中を伝搬する衝撃波を無衝突衝撃波という。

相対論的な速度を持つ無衝突衝撃波

- ・AGN(活動銀河核)ジェット
- Y線バースト

超高エネルギー粒子の起源と考えられている。



上流下流

相対論的無衝突衝撃波

における物理過程 電磁場とプラズマを構成する粒子が 複雑に関係する**非線形現象** 



●シミュレーション法

フェルミ1次加速のような **一部の粒子を高エネルギーまで加速させる** 非断熱的なプロセスの理解には **PIC (Particle-In-Cell)法**が有効。

磁気流体近似(MHD法)

粒子をまとまった系として みなし、流体として扱う。 **熱的な系**に有効

粒子シミュレーション(PIC法)

個々の粒子の運動方程式 を解く。

• PICシミュレーション法の特徴 粒子 ・・・ 相対論的な運動方程式  $\frac{d\vec{u}}{dt} = \frac{q}{m} \left( \vec{E} + \frac{\vec{u} \times \vec{B}}{\gamma c} \right) \left\{ \gamma = \frac{1}{\sqrt{1 - \left(\frac{v}{c}\right)^2}} \right\}$ 電磁場 ··· グリット上でのMaxwell方程式  $\frac{1}{c}\frac{\partial \vec{E}}{\partial t} = \nabla \times \vec{B} - \frac{4\pi \vec{J}}{c} \quad \bullet \quad \nabla \cdot \vec{E} = 4\pi\rho$ (CGS系)  $\frac{1}{2}\frac{\partial \vec{B}}{\partial \vec{B}} = -\nabla \times \vec{E}$ •  $\nabla \cdot B = 0$  $c \partial t$ 

Numerical Cherenkov Radiation







 ・数値上 プラズマ速度 > 電磁波の位相速度 (v=0.9999c)

数値不安定として発生 = 数値チェレンコフ放射

# oMaxwell方程式の差分解法に伴う数値分散











• FDTD法における電磁場の位相速度の分散関係 離散化させた平面波の式

$$B_{(y)} = B_{0(y)} \exp\left\{i(\omega s \Delta t - (k_x l \Delta x + k_y m \Delta y + k_z n \Delta z))\right\}$$
$$E_{(z)} = E_{0(z)} \exp\left\{i(\omega s \Delta t - (k_x l \Delta x + k_y m \Delta y + k_z n \Delta z))\right\}$$

を代入することで得られる、FDTD法における分散関係

$$\omega \Delta t = 2 \arcsin\left[\sqrt{\left(c\frac{\Delta t}{\Delta x}\sin\frac{k_x\Delta x}{2}\right)^2 + \left(c\frac{\Delta t}{\Delta y}\sin\frac{k_y\Delta y}{2}\right)^2}\right]$$

分散公式 
$$\omega = ck$$
と異なる形で現れる。 $\left(k = \sqrt{k_x^2 + k_y^2}\right)$ 



pCANSでは、FDTD法と異なる **陰的(Implicit)な解法**を採用している。

s+1/2 における物理量を、 s+1とsにおける情報より定義している。

$$\vec{F}^{s+\frac{1}{2}} = \frac{1}{2}\vec{F}^{s+1} + \frac{1}{2}\vec{F}^{s}$$

陰的解法による、分散関係は

$$\omega \Delta t = 2 \arctan \left[ \sqrt{\left( c \frac{\Delta t}{\Delta x} \sin \frac{k_x \Delta x}{2} \right)^2 + \left( c \frac{\Delta t}{\Delta y} \sin \frac{k_y \Delta y}{2} \right)^2} \right]$$

• 分散関係の比較

パラメータ ・・・ 
$$\Delta x = 1.0, \Delta y = 1.0, \Delta t = 0.5, c = 1.0$$

#### FDTD法(explicit)

$$\omega\Delta t = 2\arcsin\sqrt{\left(c\frac{\Delta t}{\Delta x}\sin\frac{k_x\Delta x}{2}\right)^2 + \left(c\frac{\Delta t}{\Delta y}\sin\frac{k_y\Delta y}{2}\right)^2}$$



#### pCANS陰的解法(Implicit)

$$\omega \Delta t = 2 \arctan \sqrt{\left(c \frac{\Delta t}{\Delta x} \sin \frac{k_x \Delta x}{2}\right)^2 + \left(c \frac{\Delta t}{\Delta y} \sin \frac{k_y \Delta y}{2}\right)^2}$$





# ○Numerical Cherenkov Radiation 発生の理論







①PSATD法

フーリエ空間で Maxwell方程式を解き、 解析解を得る方法。 ②特定のクーラン数を選択し、 不安定性の成長率を抑える方法



エイリアスや、計算コストの問題

# 近年における数値チェレンコフに対する発表

Vay et al., J. Comp. Phys, **2011**, "Numerical methods for instability in the modeling of laser wakefield accelerators in a Lorentz boosted frame"

特定のクーラン数において、不安定性の成長率が落ちる

Godfrey and Vay, J. Comp. Phys., **2013** Xu et al., Comp. Phys Commun., **2013** 

クーラン数が0.5において 成長率が落ちると発表された



Uniform Field Interpolation

以上の論文とは異なったスキームである pCANSを用いて同様の結果が得られるか確認。



クーラン数 1.0 において

Numerical Cherenkov Radiation を抑えられているか。



クーラン数 1.0 において

Numerical Cherenkov Radiation を抑えられているか。





$$\Delta x = 1.0, \Delta y = 1.0, c = 1.0$$
  
 $\Gamma = 10$  (上流速度のローレンツ因子)  
 $v_{th} = 0.1$  (熱速度) n = 10 (セルあたりの平均粒子数)

#### 背景磁場なし







。相対論的衝撃波への応用(温度 $T/mc^2$ )





 $x \cdot \frac{\omega_{pe}}{\omega_{pe}}$ c



○ まとめ、考察

陰的解法による分散関係 を求めることにより 数値チェレンコフ放射発生の理論を理解。

pCANSスキームにおいて、クーラン数を  $c \frac{\Delta t}{\Delta x} = 1.0$  付近にとることで 数値的な不安定性の成長率が抑えられる。 紹介した論文におけるクーラン数  $c \frac{\Delta t}{\Delta x} = 0.5$  と異なるのは、 **数値分散関係の違い**によるものと考えられる。

 $c\frac{\Delta t}{\Delta x} = 1.0$  をとることで、 $c\frac{\Delta t}{\Delta x} = 0.5$ 計算コスト削減 と比較して、 $\Delta t$ を大きくとれる。

空間·時間2次精度

クーラン数を2倍にすると 誤差の大きさに4倍の違い

今後の課題

# 今回得た数値チェレンコフが解消される クーラン数 $c\frac{\Delta t}{\Delta x} = 1.0$ を用いて

# **多次元の相対論的衝撃波における粒子加速**の解析にアプローチしていく。

ご清聴ありがとうございました。